



TITLE:

セラピストの変性意識状態に関する一考察

AUTHOR(S):

廣瀬, 幸市

CITATION:

廣瀬, 幸市. セラピストの変性意識状態に関する一考察. 京都大学大学院
教育学研究科紀要 2000, 46: 336-347

ISSUE DATE:

2000-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57358>

RIGHT:

セラピストの変性意識状態に関する一考察

廣 瀬 幸 市

A Discussion on the Therapist in Altered States of Consciousness

HIROSE Koichi

I. はじめに

意識というテーマについての関心は、心理学史の中では周期的に盛衰を繰り返してきたが、Wundt, W., Titchener, E. B. 以降では等閑にされてきた。しかも、Watson, J. B. が提唱した行動主義の台頭により、この数十年間は低迷し、その背景に埋もれてしまっていた感がある。とりわけ変性意識状態は、西欧の心理学の中では、病理的、現実逃避的、退行的、あるいは社会的に逸脱した価値の低い現象と見なされてきたという事情がある。このような歴史的な文脈の中で、変性意識状態の研究は19世紀末のJames, W.や Freud, S.まで遡ることができる。近年について見れば、アメリカでは1960年代以降この領域の研究成果が次々と上げられた。当時アメリカでは宇宙開発への関心が高まり始めており、超上空を飛行するパイロットの心身への影響が様々な観点から研究されたのだった。宇宙飛行士の超上空での体験は、感覚遮断だけではなく、催眠や瞑想、宗教的な修行、幻覚剤などの意識体験とも極めて類似しており、こうした意識状態の研究は、実験室での催眠現象の研究等ばかりでなく、ヒューマニスティック心理学やトランスパーソナル心理学などの分野にまで拡大している。

本稿では、変性意識状態が心理療法において重要な意味を持っていることを明らかにしながら、セラピストがその状態にあることについて考えてみることにしたい。

II. 変性意識状態について

我々が日常的な生活の中で変性意識状態 (Altered States of Consciousness, 以下ASCと略) になるような場面を具体的に考えてみると、階段やその他からの落下事故や、スポーツの最中のあるいは乗物からの転倒事故に代表される突発事故がすぐに思い浮かぶ。その他に、日常の中で意識が分離したように感じられる時の経験などもこれに含まれるだろう。芸術的行為や読書に熱中して我を忘れた体験や、スポーツにおいてピーク・パフォーマンスをなした時の体験なども挙げることができよう。

このASCについては、今まで幾人かの研究者によって定義がなされてきたが、斎藤 (1981)

は次のように定義している。「ASCとは、人為的、自発的とを問わず心理的・生理的・薬物的あるいはその他の手段・方法によって生起した状態であって、正常覚醒状態にいる時に比較して、心理的機能や主観的経験における著しい異常性や変容を特徴とし、それを体験者自身が主観的に（もしくは他の客観的な観察者によって）認知可能な意識状態である」。さらに「ASCの生じる経路は多様であり、それは経路の影響を受けて固有の意味を持つ」と述べている（1991）。

ここで、ASCが生じてくる経路は、人為的、自発的の2つの条件に大別してみてもかなり存在することが判っている。それを模式的に表したものが斎藤による図1である。同じASCの範囲に含まれながら、一方は洞察を伴う至高体験であり、他方はアルコールによる酩酊であるのは、ASCへ至る経路による影響である。各々の経路によって影響を受けて生じたASCの「価値」には深浅の程度の差がある、と斎藤は述べている。例えば、至高体験や超越的体験は深遠なものである。

その一方で、ASCを心理的特徴の面に限定して捉えれば、全ての体験に共通して見られる成分もあるとし、その特徴を表1のように2つに分類している。

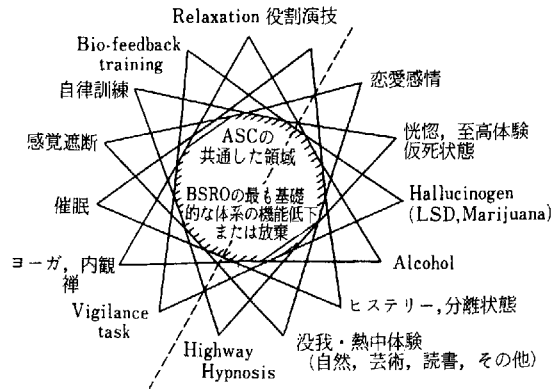


図1 各種ASCの経路別にみた生起過程
（中央の部分が全てのASCの共通領域）

表1：根源的意識状態（変性意識状態）の心理的特徴

1. 喪失感覚
 - (a) 時間感覚の喪失……時間の歪曲・停止、忘我など
 - (b) 空間感覚の喪失……方向性のズレ、浮遊感、孤立感など
 - (c) 言語感覚の喪失……言語的表現への抵抗感
 - (d) 自己感覚の喪失……身体像の歪曲、分離感など
 - (e) 主観—客観の差の感覚の喪失……彼我の一体感
2. 派生的感覚
 - (f) 恍惚感……至福感、夢幻の境地、至高体験など
 - (g) 受動性……被動感、リラックス、退行性など
 - (h) 注意集中……熱中感、没頭、選択的注意集中など
 - (i) 一時性……一過性、儚さ、空虚感など
 - (j) 宇宙識……啓示的、洞察、周囲との一体感など

即ち、その第一は、基本的な現実感覚の機能低下または喪失である。これを説明するために彼はBSRO（日常の現実志向のための行動体系、Behavioral System of Reality Orientation）を想定し、それが機能低下もしくは放棄された時ASCが出現するものと考えた。その代表的な

ものが時間感覚・空間感覚・自己感覚・言語感覚・主観と客観の差を区別する感覚等である。これらは日常生活における現実志向性を放棄することであり、非現実の世界に入るための前提条件である。その第二は、第一の喪失感覚の結果として派生的に生じた特徴であり、受動性・一時性・注意集中・恍惚感・宇宙識である。これらは、非現実に入ることによって体験できる新たな意識の世界の拡大である。現実の行動原理を放棄して、改めて非現実の新たな世界の自由を体験することにASCの創造的意義が存する、と斎藤は述べている。ここで、彼の言うBSROの機能低下や放棄の条件をまとめたものを表2として載せる。

表2：BSROの機能低下や放棄の条件

- ①感覚刺激の上限および下限を超過……感覚遮断，催眠，集団による混乱状況，滝行，火行，断食などの修業
- ②脳中枢部への物理的・化学的な刺激……幻覚剤など
- ③仮死状態，昏睡状態
- ④睡眠，まどろみ，夢
- ⑤連続的な単調刺激の提示
- ⑥状況に適切な気分……心身共にリラックスできる雰囲気，例えば，ムード音楽・美しい夜景など
- ⑦非常に新奇な状況に対処できない時……ショック，パニックなど

ところで、斎藤は近年になってASCの名称を「根源的意識 Original Consciousness」と変更した(1993)。催眠研究に携わってきた経緯で、変性意識状態は新たな意識状態が形成されたものではなく、初めから内在する意識が顕在したに過ぎない、と彼が考えるようになったためと思われる。また、変性意識状態という語は覚醒意識状態が拡大、変性して形成されるというニュアンスが含まれていると考えて、根源的意識という語に置き換えた、と彼は説明している。斎藤(1993)によると、ASCは西欧のこれまでの主知主義的パラダイムからは病理的・現実逃避的・退行的として軽視されてきたが、別の視点から意識を捉えることも可能である。それが彼の言う「人間には本来的に知を超越したレベルで内在する基本的な意識が機能している」という考え方である。意識の深層にこそ生命の真相が内在しており、BSROを捨象したところに生命の真実としての本質的な意識が潜在している、と彼は考えた。この考えは Bergson, H. の思想と軌を一にしていると述べており、Bergsonの言う生命に本来的に内在する根源的力を制御するものは、我々が日常に自覚している意識レベルを遥かに超えた意識の存在であると彼は考えている。そしてこの意識を「人間が生命を維持して行くときの一つの機能であり、生命活動の表象作用である」と考えたのである。

以上、ASCについて見てきたが、斎藤のように更にASCを独自に捉え直すという発展的な見方があることが判った。

Ⅲ. 成長を促進する関係における変性意識状態

(1) 変性意識状態にあること

ところで、ASC研究は広く人間理解のために役立つという意味合いにおいてしか我々臨床家に寄与するところがないものなのだろうか。ASCに馴染みがない人にとってみれば、自分たちが扱う人間の心という大きな研究対象の中の一つのテーマに過ぎないのかも知れない。しかし、臨床家のRogers, C. R. が「ASCにあること」をセラピストの重要な特質と考えていたのだと聞かされたならば、どうであろうか。

Rogers (1980) は「The Foundations of a Person-Centered Approach」の中で、「この宇宙には、ある形成的傾向 (formative tendency) が働いていて、しかもそれはこの宇宙のあらゆるレベルで観察できる」という、1960年代から持っていた根本的な仮説を提示し、「(形成的傾向は) 宇宙空間・結晶・微生物・より高等な生物・人間等を観察することによって跡づけることができるし確認できます。これは、より大規模な秩序・複雑性・相互関係に向かう進化の方向と言えます。人類においては、単細胞から始まって複雑な生命機能へ、意識に浮かび上がらない世界に気付き感じ取る方向へ、有機体と外的世界についての意識的覚知へ、人類を含む宇宙システムが調和に満ち統一されていることへの超越的な覚醒 (transcendent awareness) へ向かっていく個人の変化の内に、この傾向 (形成的傾向のこと、筆者註) が認められます」と述べている。

この論考の中で、Rogers は 'ALTERED STATES OF CONSCIOUSNESS' という節を設けて、Grof夫妻 (1977) や Lilly, J.C. (1972) の研究を紹介して、「これらの研究が明らかにしているのは、変性意識状態にある人は、この宇宙の進化の流れに触れて、その意味を掴むことができるということです。彼らは、すべては一つであるという超越的な体験へ向かう動きとしてその流れを体験しています。彼らは、個人の自己が美や調和や愛といったより高い価値の全領域に解消される、と描写します。個人はこの宇宙と一つであると感じます」と述べている (1980)。そして、彼らの考え方を、クライアントとの関係や特に集中的グループ体験で得た自身の経験から肯定し、次のように述べている。

「私がグループのファシリテーターやセラピストとしてベストの状態にある時、(これまで論じてきたのとは別の) もう一つの特徴があることを発見しました。私が自らの内なる直観的な自己 (intuitive self) の最も近くにいる時、私が何か自らの内に未知なるものに触れている時、そして恐らく私がクライアントとの関係において幾分か変性意識状態にある時、私のするどんなことも癒し (healing) に満ちているように思えるのです。その時、ただ私がそこにいること (presence) が人を解放し援助します。この経験を無理矢理作り出すために私ができることは何もありません。しかし、私がリラックスして私の超越的な核心 (transcendental core) に近づくことができる時、私は関係の中で奇妙かつ衝動的な仕方では振る舞ってよいのです。それは、合理的に正当化することのできない仕方、私の思考過程とは何の関係もない仕方です。しかし、この奇妙な振る舞いは、後になって正しいということが不可思議な風に判明します。それらの瞬間には、私の内なる魂 (inner spirit) が手を伸ばして他者の内なる魂に触れたように思われ

るのです。私達の関係はそれ自体を越えて、何かより大きなものの一部になります。深い成長と癒しとエネルギーとがそこにあるのです」。

そして、更に続けて、上に述べたような現象が起こったワークショップに参加していた人が語ったと思われる表現を引用している。それを以下に紹介する。「とても深いスピリチュアルな経験でした。このコミュニティのスピリットが一つになった (the oneness of spirit in the community) と感じました。私達はお互い話をしているのだけど、一緒に息を一緒に感じていました。私達各々を吹き込む〈いのちの力 (life force)〉…それが何であろうとも…を感じました。〈わたし (me-ness)〉とか〈あなた (you-ness)〉の通常の壁がなくて、その力の存在 (presence) を感じたのです。それは、自分を意識の中心とを感じる時の瞑想のような経験でした。その異様なまでの一体感で、そこにいる一人一人が切り離されているという意識を持ちつづけることがはっきりとしなくなってきたのです」。

興味深いのは、Rogers が上で引用した2カ所の記述を1986年、彼の死の前年に公刊された論文 “Client-Centered Therapy” の中でそのまま再録していることである。ここに述べられていることがいかに彼にとって重要であったか、容易に想像できよう。しかも、この論文では、「成長を促進する関係の特質」として「純粋性」「無条件の肯定的配慮」「共感的理解」を挙げて説明した上で、「もう一つの特質」という題の節を設けて、そこにその箇所を載せているのである。それ故、そこに述べられている「自らの内なる直観的な自己の最も近くにいること」「クライアントとの関係において変性意識状態にあること」が、「純粋性」「無条件の肯定的配慮」「共感的理解」の3つと並ぶ第四の必要十分条件ではないかと取りざたされる状況が生じた。その辺りの事は、筆者は別稿で論じたのでここでは取り上げない。しかし、大切なのは、「クライアントとの関係において変性意識状態にあること」が促進的な治療におけるセラピストの態度として重要だと Rogers が考えていたということである。

(2) 離魂融合

「自らの内なる直観的な自己の最も近くにいる」あるいは「クライアントとの関係において変性意識状態にある」ような事態が起こっている時のセラピストの状態を、また別の視点から見てみることにする。精神療法家の神田橋は『精神科診断面接のコツ』の「患者の身になる技法」という章の中で次のようなことを述べている (1984)。「『患者の身になる』技法としての離魂融合現象では、体全体、体の感覚全体が向こうに移ってしまうようになる。そしてこちら側の肉体と意識とは、ほとんど死に体というか、意識にのぼらなくなり、患者の肉体に重なっている部分が意識し、体験しているような錯覚が生じてくる」。そして、その時の状態を「自分の心身に注意が全く向かず、どんな姿勢をしているか、どんな表情か、どんな気分か認知されない状態」と表現している。神田橋は、努力・工夫して作り上げたそのような状態の「完成された形」は、しかしながら「ほんの一瞬、おそらく十分の一秒単位の長さしか維持できない」と断った上で、「その期間は、『自他の境界が消滅した瞬間』と形容すると感じが伝えられそうな一種奇妙な感覚を伴い、少しだが自分を見失う恐怖感を伴うこともある。そしてその短い期間の間に、患者の心性がつかめたような新鮮なひらめきが生ずることが多い」と述べている。

ここで神田橋が述べている「離魂融合」を、技法として努力・工夫して人工的に作り上げたものとのみ捉えてはならないであろう。ここで表現された離魂融合現象は、先に引用したRogersの「セラピストがベストの時の特質」の別表現であろう事は恐らく間違いあるまい。「自分の心身に注意が全く向かず、どんな姿勢をしているか、どんな表情か、どんな気分か認知されない」状態とは、先に見た「自己感覚の喪失」に相当するし、『「自他の境界が消滅した瞬間』と形容すると感じが伝えられそうな一種奇妙な感覚』は、「主観—客観の差の感覚の喪失」に相当し、ワークショップ参加者の表現と驚くほど一致する。更に、その瞬間に「新鮮なひらめきが生ずることが多い」というのは、「宇宙識」に相当し、「自らの内なる直観的な自己の最も近くにいる」ことの別表現と見なすことができる。逆説的な言い方をすれば、Rogersであれ神田橋であれ、熟練した名セラピストは皆同じ様な事態を体験的に知っており、それを表現する際の表記の仕方が違うだけなのである。

(3)非人称性

離魂融合現象により、セラピストがベストの状態にありクライアントとの関係において変性意識状態にある時の、セラピストの状態がより一層理解できるようになった。ここで更に、「非人称性 (Im-personality)」という観点を導入し、この状態をより立体的に捉える試みをしてみたい。

先に、神田橋の言う「患者の身になる技法」の中で最も困難な離魂融合現象が生じる時には、セラピストは「ほとんど死に体」になっていることを見ておいた。そして、このような事態は森岡（1991）によれば、「治療的な『非人称性』とは端的にいうてこのような状態を指す」のだという。森岡の言う、この「非人称性」とは一体どのようなことであるのか。

元々「非人称性」という言葉は、Rogers 本人の言葉ではない。Mrs. Ett と呼ばれる若い既婚婦人がRogersとの面接の第12回目に語った“無人格 (impersonal)”という言葉として発せられたものを書きとめたものなのである。彼女の発言は次のようである。

「先生は……ほとんど無人格なんですものね」「私の……私達のとは言えませんわ……確かに先生は、私には何も与えて下さっておりませんものね、私達の、と言えるようには……でも私の先生との関係は魅力的ですわ。私、それを楽しんでおりますの。とても純粋なんですもの。……申し分ないし、無人格で、性的でなくて、あらゆるものが水平に置かれていて。先生は救命ブイみたいなものですわね」。

Rogersは、セラピー終了後にMrs. Ettが驚くほど何度も「無人格」という言葉を使って治療関係の特質を叙述しようとしたとコメントしている（1951）。抜粋された面接記録から判ることとして、Mrs. Ettは普段の人間関係においては、自分の事を話していくと、次第に相手に恐れを感じるような傾向があった。しかし、Rogersとのカウンセリングにおいては、そのような感情は全く起こらなかった。彼女はRogersとのカウンセリング関係のこの特殊性を言い表そうとして「無人格」という言葉を使ったのである。したがってそこには、関係が冷ややかだとかセラピストの態度が無関心だという意味は含まれない。むしろ、そこでクライアントが感じるのは「安全 (secure)」の感覚なのである。「一切の防衛が除去されるところの関係としてその関

係を経験することを、クライアントが次第に許容するようになるのは、カウンセラーにより、何らの評価も、解釈も、探索も、個人的な反応もないであろうという、この絶対的な保証なのである」とRogersが説明するような感覚なのである。そして、それは「カウンセラーによる賛同からもたらされるのではなく、何かもっとずっと深いもの……即ち、完全に首尾一貫した受容……からもたらされる」のだという。

クライアントがそれまで経験したことのない、このようなユニークな経験を得るために、セラピストの側では、「クライアントの経験に入り込むために、自分自身を一時的に取り払おうとする、温かい積極的態度」が要請される。それは「カウンセラーは、セラピーの目的のために「クライアントの別の自己(another self)」となるように人格を除去されている」あるいは「あなたのお役に立つように、私は自分自身を排除するわけです(I will put aside myself.)」「私の力の及ぶ限り完全にあなたが知覚している世界へと入り込むわけです。ある意味で、私はあなたのいま一人の自己(another self for you)になるわけです」とも表現される。ここにおいて、セラピストの「非人称性」とは、Rogersの言葉で表現すれば、「カウンセラーという個人(person)……自分自身の要求を持って評価し反応している人間……が極めて明白に欠如している、ユニークな経験」であることが判った。なお参考までに、ここで述べられている事態、即ち、セラピーの場面ではセラピストは日常的自己から離れること、その結果として、クライアントの「もう一人の私」になること、を森岡はカウンセラーの「離心性」と名付けている(1989)。

Ⅳ変性意識状態への方途

ここまで見てきた上で、改めてセラピストがASCにあることを考えてみよう。セラピストがクライアントとの関係においてASCにある時、セラピスト側にどのような事態が生じているかについて、これまで見てきた。そこで次に、セラピストがASCにあるためにはどのようなことがなされなければならないのか、について見ていくことにする。

(1)神田橋の技法から

まず始めに、神田橋の技法について見る。彼は「患者の身になる技法」をその媒介手段によって4つに分けて説明している。それらは①現実に場所を共有、②イメージで場所を共有、③現実に身体を共有、④イメージで身体を共有、である。詳しい説明は是非原著に当たっていただきたいが、筆者なりに要約すると、①は患者の家を実際に訪問したり、患者の椅子やベッドにかけてみる、②は患者の家の間取り図を描いてもらったり、話題になっている場を視覚化したりする、③は患者の姿勢や動作、言葉・アクセント・テンポ・呼吸などを真似る、④が離魂融合、ということになる。これら4つの技法は、①が最も直裁的で効果が大きく、練習も必要ないのに対し、④は最も微妙であり、感性の軽業であるから習練が必要であり、天与の才能も要請される。また、①を何回か試みると②を身につけ易くなり、②を試みていると③のセンスが育ち、③に馴れていくと④に入り易くなるという発達段階がある、と述べた上で、4つはそれ

それ得意な領分があるので、4つとも習熟しておき、時に応じて即座にあれこれ使い分けると便利だと推奨している。

これにより明らかなように、④の離魂融合は技術の発達段階として最上位に位置しており、高度である。神田橋自身「心身のコンディションのよいときでない」と技法④はつかい難い」と述べているほどである。しかし、この技法は「この十年間にわたくしが開発し、面接技法上の定石やコツとして述べていることがらのほとんどは、『離魂融合』法を介してのその場の思いつきである」と付け加えている(1994)。そして更に、面接の現場では神田橋自身は、自分が述べてきた定石にわざわざ依拠することはない、と述べている。このことは、定石を作ったのは彼なのだから、自分で編み出した技法は全て身に付いているのは当たり前で、わざわざ意識し直して依拠する必要などないのだ、と言っているものと捉えるのではなくて、彼はよほど調子の悪い時でなければ技法④を使いこなせるので、その時その場のクライアントとの関係の中で最もふさわしい治療者としての態度・行動を常にとることができる故に、定石として自分の外に置く必要がないのだ、という意味に解釈するべきであろう。つまり、離魂融合現象が起こっている時のセラピストはそれほどクライアントの世界に完全に調和しているのである。

したがって技法としては、セラピストがクライアントとの関係においてASCにあるためには、セラピストは言わば究極を目指す技法を修練しなければならないのである、と見ることができよう。

(2)Rogers によるセラピストの3条件から

次に、Rogersのセラピストの3つの態度条件について見ることにする。「無条件の肯定的配慮(unconditional positive regard)」、「共感的理解(empathic understanding)」、「純粋性(genuineness)」あるいは「一致(congruence)」。心理療法を学んだことのある人なら誰でも知っている3条件だが、これらを改めて、先に見た「非人称性」の観点から見直してみよう。なお、3態度条件は“A theory of therapy, personality and interpersonal relationships as developed in the client-centered framework”(1959)を基にする。

①共感的理解について

これは「セラピストは、クライアントの内部的照合枠を共感的に理解するという経験をしていること」と述べられている。共感的理解は、他人の内部的照合枠を正確に知覚することであり、それに付着している情動的要素や意味をも知覚することである。その際に、自分はあたかもその人であるかのようなになるのだが、しかも決して「あたかも……のような」という性格を失わない状態である。このあたかもその人であるような状態を極限まで進めると、先に神田橋の「離魂融合」法との関連で先に見たようなことになる。そして、その状態こそがセラピストの非人称性なのだ、と既に述べた。

②無条件の肯定的配慮について

これは「セラピストは、クライアントに対して無条件の肯定的な配慮を経験していること」と表されている。「一般的に言って、受容(acceptance)と尊重する(prize)こととは、いずれも無条件の肯定的配慮と同義語である」とも述べられている。ここで、経験するとは、「その時々

の感覚的、あるいは生理的な事象の刺激を有機体が受け取ること」であり、「それが言及しているものをより完全で正確に象徴化する過程を進めることを意味している」。

セラピストが一切の評価も交えずにクライアントの言述に積極的に関心を寄せることがいかに大切かは、クライアントに拒否され受容されなかった自己知覚 (self-perception) は「自己に対する脅威を含まない一つの社会的場面……もう一人の人間、即ちカウンセラーは、ほとんど代理自己 (an alternate self) となり、この同じ知覚を理解と受容の態度で見ている……においてのみ、自己の一部として認められるようになる」という事実を考えれば判るのである。このようなセラピストの態度を、クライアントの Miss Vib は「情動的調子を含まない温かい受容 (warm acceptance without emotional overtones)」あるいは「関心を伴った非人称性 (impersonality)」と呼んでいる。そして Rogers は、「カウンセラーが、可能な限りにおいてクライアントの内部的照合枠 (the internal frame of reference) を身につけること、クライアントが世界を眺めているままにその世界を知覚すること、クライアントが自ら眺めているままにクライアント自身を知覚すること、そのようにしている間は外部的照合枠に基づく一切の知覚を排除しておくこと」と語っている。このような態度を押し進めていけば、先にも引用した「あなたのお役に立つように、私は自分自身を排除するわけです。そして、私の力の及ぶ限り完全にあなたが知覚している世界へと入り込むわけです。ある意味で、私はあなたのいま一人の自己になるわけです」という、セラピストの非人称性に辿りつくのは、もはや自明であろう。

③純粋性 (一致) について

これは「セラピストは、二人の関係 (relationship) の中では一致している状態にあること」と表されている。端的に言えば「セラピストがセラピィの関係の中で経験と自己概念 (self-concept) を一致させていること、あるいは純粋な態度でいること」である。これは、クライアントとの今ここの関係 (immediate relationship) におけるこの特定の瞬間に、セラピストがその瞬間の経験を正確に象徴化し、自己像に統合しながら、完全にかつ十分に自己自身になること、と説明されている。

このことを別の表現で見てみよう。クライアントはセラピストの共感と受容とに気づくにつれ、何らかの安全感を経験し始める。そして、現在の自己体制 (self-organization) と矛盾撞着して直面できず知覚できない経験の諸要素を探查するようになる。いま一人の人間であるこの受容的な他我、つまりセラピストは「クライアントの自己を、クライアントがそれを知っているままに知覚し、かつ受容する。セラピストは、また、意識に上ることを否認されている対立する様相を知覚し、それらの様相をもまたクライアントの一部であるとして受容する。しかもこれらの受容は両者とも、同じ温かさや尊敬を持つ受容なのである。このようにしてクライアントは、自分自身のこれらの二つの様相を受容することをいま一人の自分の中で経験することにより、同じ態度を自分自身に対して取ることができる」。このようなプロセスをクライアントが辿るためには、セラピスト自身も経験に開かれて (open to experience) いなければならないし、セラピストの自己と経験が一致していなければならない、ということが窺い知れるのである。しかもそれは「関係の中で自己自身になりきる」以前にあらかじめなされている必要

があるだろう。なぜなら、そのような純粋性を関係の中で体現しているセラピストがクライアントの目の前にいることで初めて、クライアントは「同じ態度を自分自身に対して取ることができる」ようになるからである。

ここで、いったんクライアント中心療法そのものに目を向けることにする。「クライアント中心」という言葉にRogersはどのような意味を込めようとしたのだろうか。森岡（1991）によれば、この言葉は「治療者の単なる姿勢や態度を表しているのではない。……明確に技術的な意味が『クライアント中心』ということばにこめられている」。そして、「クライアントの」経験世界と言い表した場合、クライアントをセラピストの向こう側に置いて、セラピストはできる限りその世界に接近するということでは全くなくて、セラピストもクライアントの経験世界のただ中に入り込んでいる、換言すれば、クライアントの今ここでの世界は少なくとも一部はセラピストの経験世界でもある、ということの意味しているのである。したがって、セラピストが自らの主観的世界の内側においてクライアントの世界を理解するのでは全くない、ということになる。森岡は、そういう意味において「クライアント中心」だと述べる。そこで現れる現象世界（経験世界）は、クライアントのものでもありセラピストのものでもあるが、同時に、クライアントのものでもなくセラピストのものでもない。むしろ現象—経験の世界が前面に出てくる。そして、そのような事態ではセラピスト側の絶えざる「脱中心化」の動き（後に「離心性」の運動と呼び変えている）が要請されるのだ、と主張している。その時、「経験をして、それ自体の意味を我々に告げさせる」場が生成されるのである。セラピストは、自らにも判っていない経験世界へと、クライアントが切り拓くのに付き従っていくのである。

Rogersは3つの態度条件のうち、「純粋性」を最も重視した（1959）が、セラピストが自己自身であるために自己一致していなければならない経験とは、上で見たような経験世界のことなのである。そうであるならば、セラピストの非人称性という特徴が当然ながら出現することになるのである。

以上、セラピストの非人称性という観点から見てきた。このように見てくると、セラピストの非人称性というのは生易しいものではないことが判ってくる。セラピストが現象—経験世界に入り込む時、クライアントの言表に傾聴すると同時に、自らの体験過程にも耳を傾けておかねばならないのである。そのためにセラピストは、「日常の私から少し離れ、私を排除し」クライアントの「もう一人の自分」となるわけである。そして、このようにセラピストが経験世界に移動していくことが、とりもなおさず、日常の私を取り払った「非人称性」なのであった。Rogers自身も森岡もそうは言っていないが、経験のあるセラピストであるならば、そのような状態にいる時には軽くASCになっていることが確認できるであろう。

ところで、Rogersの3態度条件の観点からも、セラピストがASCにあるためにはどのようなことがなされなければならないのか、について見ていきたいところであるが、紙数も尽きてきたこともあり、Rogers自身が技法として何も述べていないこともあり、それを論じるのは本稿の範囲を越えている。機会があれば、別稿として論じてみたいと思っている。

V. おわりに

以上、セラピストがASCにあることについて論じてみた。本稿においては、心理療法の場面に関連したASCのみを扱ってきたので、ASC全体を広く眺めることはできなかった。そこで、最後に筆者がASCについて日頃感じていることを述べて本稿を閉じることにした。

ASCはⅡ節で見たように、生じてくる経路の違いによりその「価値」が異なる。促進的な治療におけるセラピストの態度として、「クライアントとの関係においてASCにあること」の価値の深浅を、今は論じるつもりはないが、このASCとアルコールの酩酊によって生じたASCとではセラピーにおいて役立つ度合いが全く違うことは明白であろう。しかし、この差異は両者をASCと呼ぶことによって消されてしまうことになりはしないだろうか。全く「価値」の異なる性質のものを一括りにASCと呼ぶことに対して、筆者は近年不満を抱いてきた。このような事態は、身体症状であれ精神症状であれ、何らかの症状を同一語で呼び慣わす行為になぞらえることができるのではないか。例えば、熱という症状について見ると、ウィルスの感冒によるもの、打ち身などによるもの、リウマチ等によるもの、何らかの精神疾患が原因で発生するもの、女性の周期性のもの等、まだまだ数え尽くせないが、様々な経路によって生じている。それらをすべて「熱」という名で呼んでみても、違った経路で生じたもの同士はそれぞれ持つ「意味」が異なるのである。医者であれば、その他の症状も勘案した上で総合的な見地から、その人の診断名をつけるであろう。筆者は、この比喻で表されるような、命名の工夫を主張しているのではない。ASCを論じる際には、論考の対象となっているASCの独自性を他の経路からのものと対照して明らかにしておく必要があるのではないかと危惧しているのである。ASCをその共通性の観点から見ていくことは実りが多いが、どの経路から生じたものもすべて人の成長を促進するものとして役立てられるものばかりではないのである。言わずもがなであるが、セラピストはクライアントの成長を促進させることのできるASCの経路について熟知しておく必要があり、自分の技能で手に負える範囲を知っておくことが肝要になるのではないだろうか。

文 献

- Grof, S., and Grof, J. H. (1977): The human encounter with death. E. P. Dutton Co., New York (山折哲雄訳 (1982): 『魂の航海術 死と死後の世界』平凡社)
- 神田橋條治 (1994): 『追捕 精神科診断面接のコツ』岩崎学術出版社
- Leahey, T. H. (1980): A History of Psychology: main currents in psychological thought. Prentice-Hall Inc. (宇津木保 訳 (1986) 『心理学史』誠信書房)
- Lilly, J. C. (1972): The center of the cyclone. Jullian Press, New York (菅靖彦訳 (1991): 『意識の中心』平河出版社)
- 森岡正芳 (1989): 「臨床における言葉の機能と役割」 現代のエスプリ 264 102-112
- 森岡正芳 (1991): 「ロジャーズ理論再考(1)―「非人称性」の視点―」天理大学学报 166 237-254
- 森岡正芳 (1991): 「クライアント中心療法へのコメント―心のエコロジーを求めて―」人間性心理学研究10(1) 53-56
- Rogers, C. R. (1951): Client-Centered Therapy. Houghton Mifflin. (友田不二男編 (1966): 『サイコセラピー』全集第3巻 岩崎学術出版社)
- Rogers, C. R. (1951): A theory of personality and behaviour. In: Client-Centered Therapy.

- Houghton Mifflin. (伊東博編訳 (1967): 「パースナリティと行動についての一理論」『パースナリティ理論』全集第8巻 岩崎学術出版社)
- Rogers, C. R. (1957): A note on the nature of man. In; Journal of Counseling Psychology, 4, 199-233 (村山正治編訳 (1967): 「“人間の本質”について」『人間論』全集第12巻 岩崎学術出版社)
- Rogers, C. R. (1959): A theory of therapy, personality and interpersonal relationships as developed in the client-centered framework. In; Psychology: A study of a ScienceⅢ, In; Koch, S. (ed.) McGraw-Hill. (伊東博編訳 (1967): 「クライエント中心療法の立場から発展したセラピー, パースナリティおよび対人関係の理論」『パースナリティ理論』全集第8巻 岩崎学術出版社)
- Rogers, C. R. (1963): The actualizing tendency in relation to “motives” and to consciousness. In; M. Jones (ed.) Nebraska Symposium on Motivation, Lincoln: University of Nebraska Press, 1-24 (村山正治編訳 (1967): 「動機および意識との関連からみた実現傾向」『人間論』全集第12巻 岩崎学術出版社)
- Rogers, C. R. (1964): Client-Centered Therapy. In; Arieti, S. (ed) American Handbook of PsychiatryⅢ, Basic Books (伊東博編訳 (1967): 「クライエント中心療法」『クライエント中心療法の最近の発展』全集第15巻 岩崎学術出版社)
- Rogers, C. R. (1978): The formative tendency. Journal of Humanistic Psychology, 18(1), 23-26
- Rogers, C. R. (1980): The Foundations of a Person-Centered Approach. In; A Way of Being. Houghton Mifflin. (畠瀬直子監訳 (1984): 「人間中心アプローチの形成」『人間尊重の心理学』創元社)
- Rogers, C. R. (1986): Client-Centered Therapy. In; Kutash, I. L. and Wolf, A. (eds.) Psychotherapist's Casebook, Jossey-bas, 197-208
- 斎藤稔正 (1981): 『変性意識状態 (ASC) に関する研究』松籟社
- 斎藤稔正 (1991): 「最近の変性意識状態研究の諸相」催眠学研究 36(2) 8-16
- 斎藤稔正 (1993): 「催眠の新しいパラダイムの提起」催眠学研究 38(1) 37-41
- Whyte, L. (1974): The universe of experience. : Harper&Row (木村雄吉訳 (1989): 『形・生命・創造』学会出版センター)

(博士後期課程1回生, 心理臨床学講座)